



## 音楽領域における大学進学に関する心理・社会的要因の検討 - 音楽大学への進学理由および適応に関する質問紙調査データ分析結果から -

著者	佐藤 典子
号	8
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教情博第45号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00126290">http://hdl.handle.net/10097/00126290</a>

さ　　とう　　のり　　こ  
佐　　藤　　典　　子

学　位　の　種　類	博士（教育情報学）
学　記　番　号	教情博　第　45　号
学位授与年月日	平成 31 年 3 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条 1 項該当
研　究　科　・　専　攻	東北大学大学院教育情報学教育部（博士課程後期 3 年の課程） 教育情報学専攻
学　位　論　文　題　目	音楽領域における大学進学に関する心理・社会的要因の検討 ー音楽大学への進学理由および適応に関する質問紙調査 データ分析結果からー
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　　倉　元　直　樹 教　授　　小　嶋　秀　樹 准教授　　宮　本　友　弘

## ＜論文内容の要旨＞

本研究は、わが国において特殊な位置づけにある音楽大学への進学を取り上げたものである。学生自身の進学理由についての認知や進学後の適応を中心として、進学に関わる心理・社会的要因について、質問紙調査データを用いたモデルの作成を中心に多角的な分析を試みたものである。以下のように全 7 章の構成となっている。

第 1 章で研究の全体像を概観した。最初に音楽領域における日本の高等教育機関への進学の現状について述べた。すなわち、音楽領域では一般的な大学進学と異なり、入学前に長期にわたり専門領域に関する知識や技能を習得する必要があることが著しい特徴となっている。次に、一般的な大学進学時の心理・社会的問題について言及した上で、音楽系における将来の代表的なキャリアとして音楽の専門家への発達について論じ、本研究の主題である音楽大学等への進学における心理・社会的問題について焦点化した上で、研究全体の目的および主要検討内容を提示した。

第2章では分析データの概要を示した。本研究は約20年間にわたり主に3時点で音楽大学に通う学生を対象とした質問紙調査データを収集している。まず、質問紙内容の概要および調査対象者の特徴について述べた。次に、質問紙調査項目の構成を示した。調査年度による一部項目の入替えについて説明を加えた。倫理的配慮についても言及した。

第3章第1節の目的は、音楽大学への進学理由の認知について検討することであった。そのため、音楽大学の1,2年生を対象にした1999年調査から、女子学生378名の進学理由項目への回答に対して斜交因子分析を行った。結果から、進学理由について5因子（「将来展望」、「能力活用」、「同一視」、「他者のすすめ」、「消極的動機」）が見出された。最初の3つの因子間に正の相関が見られ、これらの因子は積極的な動機を示すものであった。第2節の目的は、音楽大学への進学理由の認知が、大学における適応に与える影響を検討することであった。そのため、共分散構造分析を行い、進学理由と適応感との関係を示すモデルを作成した。異なる専攻間の比較も行った。その結果、すべての専攻において、積極的動機が大学での適応を導くことが示された。

第4章第1節では、2000年調査データを加えた上で、第3章第1節で行った因子分析および第3章第2節で作成したモデルについて再分析を行い、基本的な構造に問題がないことを確認した。第2節では、第3章第1節で見出された音楽大学への進学理由因子のうち、大学における適応感を高める可能性が示された3因子を取り上げ、これらの形成に影響を与える要因について検討するため、共分散構造分析を行ってモデルを作成した。「能力活用」「将来展望」「音楽的同一性（同一視）」という進学理由因子に影響を与える可能性のある要因として、大学入学以前の音楽経験、進学に対する家族のサポート、家庭の音楽環境を取り上げた。進学理由因子への直接的な影響を最も明確に示したのは、家族のサポートであった。音楽経験の要因から進学理由因子への影響力は小さく、学生の専攻によってその影響力に違いも見られた。音楽環境から進学理由因子への影響力は、直接的なものよりも、家族のサポートを通しての間接的なものであることが示唆された。

第5章では、音楽大学の学生の特徴、および進学調査使用項目と性格検査との関係について述べた。まず、音楽大学への進学決定時期に影響を与える諸要因について示した。次に、進学理由項目および進学における葛藤に関する項目について男女差の検討を行い、ジェンダーバイアスが影響している可能性を示した。また、音楽専攻の女子学生が希望するライフスタイルおよび希望進路との関係について示した。さらに、進学調査項目と性格検査との関係性について、この分析のみ総合大学の音楽専攻学生の調査データを用いて検討を行った。

第6章では、本研究の主な分析対象であるデータが1999年および2000年に行われた調査により得られたものであることから、第4章第2節で作成された本研究の中心的な位置づけを成すモデルの構成要因について、その後の社会情勢による変化の有無を検討するため、2009年および2010年データ、2017年データを加えた分析を行った。一部の指標に年度により異なる傾向が見られたが、調査対象者の専攻の偏りによるものと確認された。これらの期間で音楽大学への進学に関わる心理・社会的要因の基礎的な構造に大きな変化がないことが示され、本研究で見いだされた知見が現在でも一定の有効性を持つことが確認された。

以上の分析結果を踏まえ、第7章で総合考察を行った。本研究の結果から、音楽領域にお

いても、「将来展望」や「能力活用」のような一般的な大学進学動機研究で見いだされた因子と類似の積極的進学動機が確認され、また、積極的な理由により進学した学生の大学における適応が高まる傾向も示された。なお、積極的進学理由の一つである「音楽的同一性」についてはこの分野の特徴を示す進学理由因子であると思われる。さらに、積極的な進学理由による進学の背景要因としては、本人の音楽経験や家庭の音楽環境が直接影響するよりは、家族のサポートを学生が十分感じられるかどうかの方が大切であることも示されたが、このようなサポートの得やすさについては、ジェンダーバイアスが存在する可能性も示唆された。音楽以外にも、美術や競技系の体育など、いわゆる一般的な受験勉強とは別の準備を進学において必要とする領域が存在する。本研究は音楽という特殊な専門領域に焦点をあてたものであるが、そのような領域特有のキャリア発達過程をとらえる諸研究の一例として、一定の意義があると考えられる。

## ＜論文審査の結果の要旨＞

本論文は、音楽大学に進学した学生における進学動機と適応感との関係を中心に質問紙調査による分析を試みたものである。従来から教育心理学分野で積み重ねられてきた一般的なキャリア発達研究の文脈に依拠しながらわが国の音楽分野の特色に着目し、その社会的背景を考慮した上で分析を加えたという意味で、貴重な主題を扱った特色のある研究となっている。論文内容の要旨にあるように7章構成となっており、最初の2章で序論、データの概要が提示されたのち、3～6章で主要な分析と結果が記述され、最終章が総合考察となっている。

調査対象者を「音楽専攻分野で学ぶ学生」という限定された集団に設定したにも関わらず、量的分析に堪える規模のデータを確保して実証的アプローチを施したところに本論文の特色がある。因子分析、共分散構造分析といった相関分析的手法を駆使して得られたモデルを構成する因子として、「能力活用」「将来展望」といった進路選択に普遍的な要因と「音楽的同一性（同一視）」のような音楽分野特有の要因とが同時に抽出された。それらについて、楽器等の専攻分野による相違点や家庭の音楽経験など、音楽分野特有の環境要因を合わせて分析、考察することで、基盤としてのキャリア発達の理論に依拠しつつ、音楽分野における大学進学特有の心理的なメカニズムを実証的に描き出すことに成功している。同時に、ジェンダーバイアス、家庭のサポート、進学準備のためのコスト等、特に音楽分野に先鋭的に見られながらも現代日本社会の大学進学志望者において共通の心理・社会的課題も浮き彫りにされた。このように、領域特有の課題を通じて一般的な問題に展開可能な論点を導く着眼点の鋭さも、本論文が単なる特定分野を超えた普遍的な学術的価値を有することの証左と高く評価される点である。

なお、論文の中核をなす第3～5章のデータは1999年から2010年に取得されたもので、研究開始時点から現在まで約20年が経過している。そのため、本論文では最近になって補足的に収集したデータを加え、時代的な社会状況の変化による影響を確認するという構成を

取っている。第6章では2017年に新たに取得されたデータに基づき、研究初期のデータから最近までの経年的変化が確認されたが、主要な変数の分布に大きな構造的相違点は見出されなかった。したがって、本研究が示した進学動機と適応感のモデルは、今日でも十分に有効と考えられる。

よって、本論文は博士（教育情報学）の学位論文として合格と認める。